

降圧剤の副作用

降圧剤の副作用

市川治療室 No.80/1997.05

今回は降圧剤の種類は副作用の情報です（No.77「高血圧」も参考にしてください）

体内に入った薬剤は、肝臓で分解（薬物代謝）されてから全身に回ります。
この薬物代謝そのものが身体にダメージを与えます。
分解時に働く酵素（チロシナーゼ）が分解作業過程で活性酸素を発生するからです。

降圧剤に限らず薬剤は症状の改善に役立ちますが、
身体を全体的に考えると活性酸素の発生による障害（副作用）が問題です。

降圧剤の種類と副作用

種類	副作用
利尿剤	脱力・耳鳴り・下痢・低カルウム血症・糖尿病 腎臓の機能低下・痛風・腎不全・心筋梗塞・高脂血症
アルドステロン拮抗剤	鬱病・胃潰瘍
アルファ遮断剤	低血圧・体液貯留・関節痛
ベータ遮断剤	手足の冷え・疲労感・気管支喘息誘発 中性脂肪値の上昇・HDL（善玉コレステロール）の低下
交感神経遮断剤	性機能低下
血管拡張剤	めまい・低血圧・紅潮・血管性の浮腫・タンパク尿 好中球減少・狭心症・心筋梗塞
カルシウム拮抗剤	血圧を下げすぎる 脳や心臓の動脈に硬化のある患者では 脳梗塞や心筋梗塞

一般に日本では利尿剤、アメリカではカルシウム拮抗剤が降圧剤の一番手として処方されます。

老化・成人病などに活性酸素がかかわっていることは今日では常識になってきています。
降圧剤の連用は薬物代謝による活性酸素の持続的な発生をもたらします。

高血圧の人は他に余病を持っている場合があります。
この余病の原因が降圧剤の連用から発生する活性酸素である可能性は小さくありません。

しかも、厚生省の循環器基礎調査の発表では
降圧剤を毎日きちんと服用しても血圧の下がらない人が60%もいるそうです。

慢性関節リウマチ・全身エリテマトーデスなどの「自己免疫病」の原因としても
降圧剤が疑われています。

また、動物実験ですがある種の降圧剤には発ガン作用のあることが報告されています。

動脈壁（血管壁）の郷土はコラーゲン、弾性はエラスチンというタンパク質が担います。
エラスチンは加齢とともに減っていくので血管に弾力がなくなり血圧が高くなるのは自然です。

コラーゲンやエラスチンが正常であれば血管壁の強度と弾性は保障されるので。
血圧が200やそこらで血管が破れる心配はありません。

良質タンパク質・ビタミンC・ビタミンB6はコラーゲンやエラスチンの材料です。
ですからこれらの栄養素は高血圧の予防・回復に欠かせません。

本体内性高血圧の人が降圧剤の服用を止めると体の具合が良くなることは珍しくありません。
実際に良質タンパク質・ビタミンC・ビタミンB6の摂取で血圧の安定した方は多くいます。

高血圧対策は第一に上記の栄養摂取です。
それでも降圧剤を服用する場合は、活性酸素対策をお忘れなく！
